

サンクト・ペテルブルクの歴史地区と関連建造物群 ～ロシア絵画との出会い～

成田からサンクト・ペテルブルクへの行き方は、日本航空やアエロフロート航空の直行便でモスクワへ行き、そこから乗り継いで空路で行く方法や、フィンランド航空でヘルシンキまで行き、そこから空路または陸路で行くなどいろいろあります。サンクト・ペテルブルクは意外と行きやすいところですが、ヨーロッパの主要な都市と比較して日本人観光客がまだまだ少ないのが現状です。

ロシア渡航は査証の取得が必要であることや、過去から現在も続く両国間の歴史問題などがあり、日本人にとってはなんとなく馴染みにくい国のようにも感じますが、実際はそのようなことはなく、とても魅力的な国だと思います。また、せっかくロシアを訪れるのですから、何かはっきりとした目的やテーマをもっていくと、よりいっそう楽しめます。

ちなみに、私の旅の目的は「ロシア絵画」を堪能することでした。アエロフロート航空で成田を発ち、ゲートインはモスクワで、先に世界遺産のクレムリンと赤の広場を観てから、のんびりと夜行列車「赤い矢号」に乗って、サンクト・ペテルブルクに向かいました。

モスクワ～サンクト・ペテルブルク間は、高速列車を利用すると約4時間で到着するので、何も夜行列車に乗る必要はありませんが、旅のノスタルジーを味わいたく、こちらを選びました。車窓から注ぎ込む朝日……、朝焼けのサンクトペテルブルグ郊外の情景は、なかなかいいものです。

サンクト・ペテルブルクに到着して、まず驚いたのは、「地下鉄の駅」です。（日本人観光客は皆、驚くみたいですけど……）地下鉄エスカレータの長さは100m以上あり、そのスピードの速いのなんの。都内最長の地下鉄エスカレータは約44mだそうなので、約2倍。ホームに辿り着くと、まさにそこは地下宮殿、それとも防空壕？ 日本では考えられない構造となっています。

公共施設でうっかり写真を撮ったら捕まるのではないかと危ぶみ、撮影は控えましたが、米・ソ冷戦時代を垣間見た気がしました。

世界遺産『サンクト・ペテルブルクの歴史地区と関連建造物群』の構成資産は36件ありますが、私が訪れたのは、カザン聖堂にイサク聖堂、そして当然のことながら、エルミタージュ美術館です。そのエルミタージュ美術館で、あれっ、と思ったことがありました。それは、メインの絵画を観て周っていたところ、一番期待していた「移動展派のロシア絵画」が展示されていなかったのです。もともと移動展派の蒐集作品はエルミタージュ美術館にありましたが、ロシア美術館に移管されたそうです。両美術館は、ルーヴル美術館とオルセー美術館みたいな関係ですね。

今回の旅の目的は「ロシア絵画」を堪能すること、と先に述べましたが、ロシア絵画はイコンの宗教画から近代の前衛芸術まで範囲が広く、私が観たかったのは、イリヤ・レーピンをはじめとする「移動展派」の作品でした。移動展派をわかりやすく言うと、今から約120～150年前の「ロシア写実主義的な画家たちの」ことです。フランスでは印象派が活躍した時代です。



イリヤ・レーピン作『ボルガの船曳』（ロシア美術館）

ところで、『サンクト・ペテルブルクの歴史地区と関連建造物群』の登録物件の中で、ロシア絵画に関わるものが、いくつかあります。移動展派の作品が収蔵されているロシア美術館（ミハイロフスキー宮殿）、レーピンの名に因んだサンクト・ペテルブルク美術大学、「ペナトウイ」と呼ばれるレーピンの自宅（レーピン美術館）などです。ペナトウイは、サンクト・ペテルブルクから北へ約 10km に位置し、ガイドブックにも載っていないような郊外にあるので、さすがにここまで足を延ばすことはできませんでした。建造物群と銘打っている中、ペナトウイの登録は、サンクト・ペテルブルクの人たちの、祖国ロシア絵画への忘れぬ想いを感じられますね。

さて、最近の日本の美術界では、写実主義の人気の高まっています。さらにスーパーリアリズムを追及し、写実を超えるほどリアルに描かれた細密画の、その卓越した技巧には感動させられます。しかし一方で、懐疑的な見方をする日本人画家も少なくありません。というのは、あまりにもリアルな絵は、観る者に窮屈な印象を与えることがあるからです。観る者と対象との間に空気感があつた方が、観る者には自然に見えるのです。人の視力は（矯正しても）おおよそ 0.7~1.2 程度。写実細密画は、視力 2.0 以上の人でなければ、自然には見えない世界と言われています。モチーフ（題材）と画家の間には距離・空間があり、空気もあります。色彩もその分、くすんでしまうため、これらを考慮して描かないと、物質感が乏しくなってしまいます。つまり、リアルさに迫り過ぎた絵は、どこことなく、不自然に見えてくるのです。

とはいえ、写実主義は、緻密さやリアルさを競い合うものではありません。実は、ここまでリアルな表現を追求しているのは日本だけで、例えば、パリの展覧会の中でも、歴史と実績で双璧をなすサロン・ドートンヌ展やル・サロン展の入選作品に、そのような絵はあまりありません。移動展派もそうですが、ヨーロッパやロシアでは色調のバランスやデッサン力が重視される傾向にあるのに対して、昨今の日本の美術界は、リアルさの追求が重視されています。

私は、（もう 30 年以上も前のことですが）、高校時代に美術の受験予備校に通っていました。当時、教えてもらったことのほとんどが、この移動展派の絵の中に凝縮されています。絵の勉強をされたい方は、この移動展派の絵を学ばれることを、お奨めしたいですね。

パッケージツアーでサンクト・ペテルブルクを訪れると、エルミタージュ美術館には向かいますが、ロシア美術館にはまず行きませんし、自由行動の時間も設定されていないことも多いです。しかし、ここまで来て、ロシア絵画と出会わないなんて、もったいないと思います。エルミタージュ美術館所蔵のヨーロッパ絵画に心惹かれるかもしれませんが、サンクト・ペテルブルクの人たちが観てもらいたいのは、自分たちの絵画、ロシアの絵画だと思のです。彼らの絵は、制作当時のロシアの生活感が漂う作品も多く、かつてのロシア帝国の姿を彷彿とさせてくれます。絶対に、ロシア美術館はお奨めです。もしサンクト・ペテルブルクに行く機会がありましたら、本家本元のロシア絵画にぜひ触れてみてください。きっと“良い出会い”が待っています。

ロシア美術館内



エルミタージュ美術館内